
とある狭間の観測黒猫

ユーシン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある狭間の観測黒猫

【Zコード】

N1783Y

【作者名】

コーリン

【あらすじ】

超能力が一般科学として認知された、学園都市。そんな場所でも学生達の間では都市伝説が噂される。どんな能力も効かない人間、空を舞う円盤、使うだけで能力が上がる道具、そして……。空白の少女がその一つに触れた時、とある少年との物語が始まる。

黒猫と青い巴盤、そして赤兎（前書き）

初めまして、ゴーシンといふ者です。

こんな小説に興味を持つていただけて嬉しいです！
再スタート、と云ふことでストレートを目標に頑張ります。

黒猫と青い円盤、そして赤兎

私は何か足りない。それはお金でも時間でもないし、友達でも成績でもない。

十分というわけでもないけれど周りの人と変わらない程度には揃っているつもりだ。

でもない。

普通の女子高生と胸を張っていえる 張れるほどのものでもないが
ちなみにそれはコンプレックスではない。本当に。
とにかく十分普通なのに……彼が気になつて仕方が無いのは、彼が
それを知つてゐるからだろか。

～ある狭間の観測黒猫～

黒川瑞希は暗がりの道を持てる全力で走り続けていた。ポーテー
ルを乱暴に揺らし、スカートからシャツを振り出しながら走る。
買い物袋は、どこかで放り投げてしまつたが今はそれどころではな
い。今日の夜、ご飯よりも今のほうが重要だ。

「私が何したつてのよー！？」

彼女の背中を少し後ろから追いかけるのは人ではなく青い円盤。直径は黒川と同程度、まるでCGグラフィックのような色や光沢はどこか現実味のない浮いた印象を与える。

黒川は何故追われているかは把握していないが、何に追われているかは知っている。

都市伝説。それも最近流行りだしたもので、彼女自身詳細を聞いたのはちよつと昨日だ。

後ろから回転して迫つてくるあの円盤の縁はバッククリ開き、見た者を丸呑みにするんだとか。

この街でＳＦなんてふざけてると思っていたが、まさか自分が当事者になるなんて、と友人の話を軽く流していたことに後悔する。

「こ、こういう時つてどうすればいいんだつけ！？ ベビーニッつ飴とか、ポマードを投げつければいいの？ ああ、ちやんと話を聞いとけばーーー！」

とにかく振り返らないようにしようと前に進み続けるが、どんどん人気は無くなつて、彼女の恐怖は相乗して増幅されていく。もはや気力のみで走り続けていた彼女の耳にバチバチという火花が散る瞬間を連続させたような音が走つた。

思わず振り返ると、裂けた口ではなく、紫色の電光が彼女の目に飛び込んできたのだ。

「つおおつーー！」

まったく女性らしさを感じない叫びを発しながらも横側に飛び込んだ黒川が、自分が走つていた場所に目をやると、アスファルトが大きくえぐられていた。

間違いない、殺傷能力は十分だ。

「おかしい！ こんなあきらかに致死量でしょーー？ もしかして私が死亡被害者第一号ーー？」

混乱して危機管理能力が薄れ始めてきた黒川の「冗談のような言葉も気にせず、円盤は第二波を展開する。

(まだ何も始まつてないのに、こんなところで死ぬなんて、嫌)

今までに体験したことのない死の恐怖という非日常に実感は湧かないが、本能はそれをしつかり認識しているらしく、手がビクビク震えている。

雷光は正確に黒川の位置に向けて放たれた。そして彼女を死へと追い立てるだらう。

だが、結果はそうはならなかつた。

黒く薄い光の帯を重ねたものが半球状になり黒川を包み込んでいる。その一つ一つの面には綺麗に整列した〇の文字がひしめき合つている。

そこに触れた電撃は半球に吸い込まれるように波紋を作り、その内側には一切の変化がない。

「な、何、これ？ バリアー？」

テストで唯一赤点を出す教科は開発、そんな無能力者の黒川には起こせるはずのない奇跡ノウジョクが、彼女の目の前に広がつている。

円盤のほうも、対処に困つてゐるのか、浮遊したまま動かない。よく分からぬが、危機は脱したのではないか、と安心した黒川だつたがそれも長くは続かなかつた。

今まさに光が弱くなつてゐる。そして、彼女を守つてゐた境界はすうつと跡形も無く消えてしまつ。

(うぬぬつ！……なんでまた出ないの？ そもそも今はまだ出ないの？)
つて出せたのよ！？)

黒川の抵抗心もむなしく今度は円盤の口がハリウッド映画で出でる人食い鮫のようにガバアッと大きく開いた。

このままではたしかに危険だ。だが、今の黒川には何かを掴んだような感触がある。助かる可能性の糸口が、希望を見つけた感触が。

「させるかつつーの」

目前に迫る危機とは別の方角から誰かの声が黒川のもとまで届くと同時に何かが彼女の顔の近くの空を切る。

そして黒川がそちらに向き直るよりも速く、一筋に伸びた閃光が円盤の外側に風穴を開けた。

新たな乱入者は軌道が反れた円盤と黒川の間で立ち止まる。結論からいって、黒川は彼を知っていた。だが場違い過ぎる。タイミングよさがさらにつの違和感を生み出すだ。

杉下光輝スギシタコウキ、彼は黒川のクラスメートだ。赤黒いロップライバーのよう

な外見こそ特徴的だが、あまり発言が多いタイプではなく、それも数回しか話した事がないような離れた関係。そんな彼が自分をかばつていてる。

だが、彼女の疑問はそこだけではない。いつも学校でぼうつとしているような彼には似つかわしい物がその両手に握られている。左手には彼の髪よりも真っ赤なアタッシュケースが、右手には銃、というよりはとても小さい大砲型の長筒といった方が的確だろうか。

とにかく黒川には処理できないほどの事態が、目の前で高速展開されていく。

「杉下が、何でここにいんの？ ていうか、何で銃なんか持つてるわけ？」

「バイトの帰りに、襲われるクラスメイトを正当防衛で助けるため、だよ」

「それじゃ持つてる理由になつてないって！」

質問をはぐらかしながらも杉下は右手で引き金を引く。筒穴から飛び出すのは弾丸ではなく黒い玉のようなもので、それは空氣を裂いて押し進むにつれ、削れしていくように弾丸へと姿を変えた。何度か発泡する杉下だが今度は円盤にはあたらず、後ろのビルに焦げ目とヒビを作るだけ。取つて変わるように円盤からは杉下のいる地点に雷撃が撃ち返された。距離があるため杉下は見切つて左右後に素早く回避する。

しばらく互いに銃弾戦を繰り広げ、徐々に差が開いていくと、突然杉下は黒川の方に走り出した。

「『』は素直に撤収だな。 黒川、速く走つて」

「う、うん！」

さつきまで固まっていた黒川も彼に合わせてその場を走り去る。

円盤の死角になるだろう路地裏の狭い道をとおり、住宅や寮の区画まで逃げ切つた二人。だが、この夜の時間帯にはほとんどの人間が家の中だ。

自分達以外に誰も見当たらぬ黒川には暗闇の中をぽつぽつと照らす街灯が唯一救いに見えてくる。

「はあ、はあ、なんなのアレ……。 知つてる杉下？」

「さあ、都市伝説つて事ぐらいしか把握してないな」

呼吸の荒い黒川と比べ、杉下は来た方を眺めながら溜息をこぼすだけ。

「杉下、なんかわかんないけど助けてくれてありがとね。 間一髪つてやつだわ」

「ええ？ ああ、別に気にすんなよ。 タイミングが良かつただけだし、結果逃げてるし」

「それで十分。 ていうかあんなのと鬪えないでしょ」

「それとさあ、もう一回聞くけどなんで銃なんかつてんの？」
「さう」となく杉下の頬が少し赤くなり、声は少しずつ小さくなっていく。その反応におもわずクスリと笑う黒川。

「それとさあ、もう一回聞くけどなんで銃なんかつてんの？」
「……護身用」

「嘘に決まってるでしょうが！ 銃刀法違反とかなんとかで普通にアウトじゃん！ マフィアなの？ 杉下つてやつマフィアなの！？」

オーバーなつっこみを入れる黒川だが、実際同級生が拳銃らしきものを持つているのは明らかにおかしい。大変おかしい。

「いやいやいや、実はだな、正確にはこれは銃じゃないんだ」

「おかしなデザインを除けば完全に近代の化学兵器じゃない」

彼の持つそれの筒部分のペイント。たまにシャッターなどにスキルアウトがよく書いているスプレーアートのよつな仕様で『m i d i a』と描かれており、地の薄ピンク色と合わせて拳銃の重苦しいイメージを払拭している。

それでも先ほどの激しい打ち合いで合戦を見れば誰だろ?とそれが兵器であることを認知するだろ?。

「嘘はついてないぞ。弾も入つてないし、普通に引いてもなにも出ないよ」

しれーっとした顔で『たえる杉下』にもはや質問の意義無しと判定した黒川は周囲を照らす街灯にもたれ掛かった。
杉下の方はといふと、手前の来た道を少し戻つて、円盤を警戒しているようだ。

「ここまで来たらもう大丈夫でしょう?」

「いや、もしも力場で追つてきてるつてゆーなら、多分逃げれてないな」

「力場つて……あれよね。A I M 拡散力場。超能力者が無自覚に発してゐる微弱な力のフィールド、でしょう?」

「ああ、さつきの円盤、能力者を狙つて襲つてゐるらしいからな。もしかしたら、それを頼りにしてるかも……」

「だから、何でそんなに知つてるのよ」

「…………」

「…………」

一瞬無言になつた二人の間に頬を打つほど強い風が吹いた。

「結局杉下、は…………えつ？」

右腕が無い。だが勿論黒川のではない。もしさうなら彼女は悶え苦しんでいるだろつ。なら誰か。

杉下の右肘から下が消失している。その断面からは黒くドロドロしたものが流れ出していた。

「い、ひ、う、そで、しょ」

『ギュルギュルギュル』

叫ぼうとするが声が出ない。足は振るえ、黒川はその場にぺたんと座り込んでしまう。

宙に舞うのは、歯車が擦れ合つよつた音を立てる違和感を持つた青い月とそれに食い千切られた銃を持つ右腕だつた。その光景から目が離せなくなつてしまつた黒川はいくら絞り出しても「あ、ああ」というつめき声しか出でこない。

崩れ落ちる杉下とボトッと落ちてきた右腕は少しも動かない。

都市伝説の『人喰円盤ブルームーン』が、ひどく現実的で短絡な絶望を提示してきたのだ。さきほどのよつた打ち合いとは質が違う。そして絶望の過程もついに数メートル。浮かぶ青い円盤は一ヤニヤ

笑う調子で口を開いた。

暗がりで倒れている杉下の腹部辺りからも黒っぽい何かが流れ出ているが、黒川が血と判断するには十分だ。

「冗談でしょ？ 人って、こんな……簡単に死んじゃうの？」

動かなくなつた杉下。黒川は人の死を真近に見たことが無い。テレビの向こう側の話、誰かの親戚の親戚なんて遠い場所にあると思つていたのに。

「こんな、こんなの……」

死がこんな酷いモノだつたなんて、彼女は知らなかつた。こんな明確な恐怖も知らずに生きてきたのに。

自分の最後の居場所である街灯の光を、辺りの闇がじりじりと蝕んでくるようにさえ見えた。

無数の黒い腕が誘い込むように、その奥にあるどこか見当のつかない場所まで心を引きずり込むとする。

黒川はもう動けない。ショーンと空を切る風音に続き、割れたガラスが周囲に飛び散る。ついに光は失われた。

しかし、それに続くかと思われた円盤も黒川と同じく動かなくなつた。

幻覚やデジヤブではない。一度あつたことは二度あるといふことだろうか。もう一度同じ光景がそこに再現された。

「だからせ、やつをも言つただろ。 セせるかつて」

違つたのは、銃から飛び出した弾丸が青い円盤のちょうど中心を貫いた事だ。あるはずのない右手がもう一度引き金を引いている。

『ギギギ、ギギギ、ギギキ』

再度円盤からいびつな摩擦音が響くと亀裂が全身に走り、粉碎された氷のように砕け、青い光をまき散らす。

弾丸が貫通した中央から露出する光り輝く三角柱が砕けた瞬間、他の破片はすぐさま空中に霧散した。微かな明りで、奥に赤黒い髪の人物の姿が確認できる。

「す、杉下あ……？」

黒川の瞳から涙が零れた。助かつた事への安堵だけではない。それとはまた別の何かも。

薄れる意識と視界のなか、黒川は近づいてくる杉下を真っ直ぐ捉えていた。彼の顔は、教室で見るほんやりした表情からは想像できないほど真剣なものだつた。

「何回殺されたって関係ない。 オレは守るつて約束したんだ」

その言葉を最後に、疲労感やストレスが黒川の全身の感覚を無意識に沈めていった。

黒猫と青い円盤、そして赤兎（後書き）

最後までありがとうございました！

こんな未熟者ですが感想、アドバイス、指摘がありましたら宜しく
お願いします。

日常の狭間（前書き）

一回目、キャラが増えて日常パート？になるのでしょうか。

日常の狭間

何回殺されたって関係ない。 オレは守るって約束したんだ。 確かにそう聞こえた。

誰を守るの？ 誰との約束なの？ そんな疑問が私の心を支配する。 グルグルと頭の中で回り続ける。

そして、千切れた彼の腕。

「杉下ツ……えつと……いえ？」

私がばつと勢いよく起き上がった。 だが、視界に広がったのは見慣れた光景。 歳の割りにあまり乙女チックではない部屋。

「あれが、夢だったの？」

制服のままで寝てるなんて、よっぽど疲れてたんだろうか。

～とある狭間の観測黒猫～

とあるいつもの通学路で、夏の風物詩達にも負けないほど爽やかで瑞々（ミズミズ）しい黒のボーテール美少女（胸薄）と、ツンツンした黒髪の、それといって他に特徴が無い平凡な容姿の少年は、真夏の炎天下にさらされながら自分達の学校に向かっていた。

「ねえ上条、『ブルームーン』って知ってる？」

「悪い黒川ー、俺……天文学はちょっと」

「うーん、その発想自体は賢いんだけどそりゃないのよね」

昨日の夢らしきものを思い返していた黒川は、ふいに上条に尋ねる

が、どうやら上条は都市伝説には興味がないようだ。

「与えた情報が少なすぎたため、月食か何かと勘違いしたのだろうが、月は赤にしか変化しない。」

「夜な夜な、青い円盤が口を開けて人を丸呑みにするっていう都市伝説なんだけど、聞いたこと無い?」

「そういうやつ、青髪がそんなこと言つてたよな……でも、それって最近出でてきたやつらしいな」

「そういう、何か今流行つてるのかしら、そういうの」

「そうだなー他には、使つだけで『能力レベル』が上がる道具とか、ウチの担任が不老実験の完成体だーとか、後はー」

ウチの担任つて言つてる時点で都市伝説としてどうなのかしら、心の中でつっこむ黒川。

「死なない男とか

「死なない男?」

死なないというワードが頭に引っかかる。たしか、今日見た夢の杉下も、あれだけ出血していたにも関わらず、平然としていた。まあ夢なのだから何があつてもおかしくはないが。

「アイツから聞いた話だと、その男が高いビルから飛び降りてきて、そのまま地面にぶつかっても、しばらくすると平然と歩き出すんだつてよ」

「それだけ聞くとすゞへ意味が悪いわね

おもわずその様子を想像してしまつた黒川は苦い顔をする。

「まあ、どれもこれも、嘘っぽい話ばかりなんだが」

「人がそんな会話をしていると、すでにいつものバス停まで到着していたようだ。

「恐らく、夏休みもこれに乗る羽目なるんでしょうねー」

開発の点は努力でも黒川にはどうにもできない気がする。そして後ろにはその手の玄人が。

「ねえ、上条？ 上条聞いてる？」

ツンツン頭の少年が、両手をポケットに入れながら青ざめたまま固まつていた。

それを見た黒川は瞬時に状況を理解する。

だが、その考えが否定されることを願い、寸分の確率に賭けてみよう。

「ねえ、ど、どうしたの、上条？」

「……定期がない」

異口同音に「不幸だ」。

とある高校の昼休み、現在の黒川瑞希の残り体力は残りわずかまで減少していた。

原因是、上条がバス停で突然定期が無くなつたと騒ぎだし、それにつられている間に二人揃つて無慈悲な無人バスに逃げられてしまつたためだ。

もともと料金が馬鹿高いところを通常料金で払わなければ乗れないとなつた上条が頭を抱えていたせいで、一緒に学校まで猛ダッシュである。

とどめは一時間目の体育の黄泉川先生による猛暑版持久走というなかなかの地獄っぷり。上条は別のクラスなので本当に運が悪いのは自分なのかもしれない。

そして昼ご飯、

「食べる気力さえ湧かない。これが不幸つてヤツね」

ううつ、と机に額を押し当てる瑞希。そもそも昼食は往々に買う筈だつたので手元にはないのだが。

「大丈夫？ 瑞希ちゃんも色々と大変だね」

黒川を心配してペットボトルを渡したのが、深井真央^{フカイマオ}。同性の自分でさえ可愛らしいと思うほどの小柄なショートカットの大人しい少女だ。

その彼女のつぶらな瞳やまとう霧囲気は、曇りのない黒真珠のよつだと、初対面ながら感じていた。

「上条も上条でだけど、それに巻き込まれる瑞希も瑞希でねー。ホントに不運なのは瑞希じやないの？」

「最近そんな気がしてきた……」

うな垂れる黒川に憐れみの視線を向けてきたもう一人の少女は不知火セツナ。その外見や振る舞いから気が強そうな印象を受けるが、体力も筋力も並という部分も含め、ファッショソなどの流行に気を使っているのでこの中では一番女性的かもしれない。ちなみに、彼女のロングの茶髪は地の色なのだが、よく染めてるのか聞かれるらしい。

「上条と瑞希って同じ中学だつたんでしょう？ そんときから仲いいの？」

「まあ、中一の時に『たたかに巻き込まれてから知り合つて、つて感じかな」

「『たたか』たというのはもちろん当麻から来たのだが、その時も女性絡みだったのは言つまでもないだろ？」

「だから、ある意味『つむぎ』のは慣れてるんだけどね」

「なんかいつも展開が夫婦漫才みたいよねー」

「だ、誰が夫婦よー！ アイツはただのと・も・だ・ち・なの！ わざわざ毎回説明してるよね私！？」

「こいつらのネタを振ると過激に反応し、術中にはまる事を知っている不知火は、クスクス笑いながら「だつてさー」と続けるが、

「瑞希ちゃん、今日はまだお昼買つてないんじゃないの？」

「わうだつた！ ちょっと食堂の売店行つてくるから待つてー」

「こつてらつしゃい

鞄から質素な財布を手に取り、すぐ教室を出る黒川に笑顔で手を振る深井。

「真央、何で邪魔しちゃうのよー。 今からが大事なとこだつたのにー」

むつとしながらこつちを見てくる不知火に、

「ははは、だつて、セツナちゃんはそつといつもやり過ぎるでしょ」と苦笑する深井。

黒川が廊下を歩いていると、曲がり角の奥から聞いた覚えのある声が聞こえ、おもわず足を止めてしまった。

「何で昨日電話してこなかつたんだ」

「そんな余裕なかつたんだつて。……睨むなよ

「睨んでない」

一人は鬼つぽい杉下、もう一人はの真柴勇希^{マシバ ユウキ}。彼も同じクラスであり、その中では一番背が高く、聞いた話だと百八十以上はあるらしい。そして黒川個人が思うにクラスで一番顔がかっこいい、いわゆるイケメンなる人物だ。

角から少し覗いてみると、ちょうど背の高い真柴が黒川より少し高いぐらいの杉下を見下ろしている風に見える。たしかにあれほどの身長差なら睨まれていると思つてしまいそうだ。

「たしかにー、連絡しなかつたのは謝るけどさー、結局オレ一人でも円盤を解体出来た訳だしねー」

けつして田を呑わせようとしない杉下は困った顔を逸らし、どこか有耶無耶にしてしまった。そつた口調で弁解したが、

「それでも、昨日黒川に見られる羽田になつた。俺がいればもう少し効率良く動けたはずだ」

と、怪訝な表情で追求を続ける真柴。

「やっぱり怒つてるだろ」
「怒つてはいない」

彼はまるで一つの答えしか受け付けないといった様子で彼の前にじつと立ち塞がつている。

(私に見られた? といつては…… 昨日のは夢じゃない?)

そこで黒川は自分の名前が挙がった事に驚くと同時に、昨日の漠然とした記憶が頭の中で鮮明に浮かび始めていた。

やはりあの円盤や杉下との逃走劇は現実のものだったのか。いまいち確証が得れないが夢ではない気がするのは確かだ。

「はあ……悪かったよ。相手が能力を吸い取る都市伝説っていうから、お前の力が通じない、そーゆー展開が心配だったんだ。俺は一人も同時に守れるほど強くないから」

諦めた様に話始めた杉下の言葉は、不安そうに、それでいてどこか無力さを自嘲しているように、黒川にはそう聞こえた。

「ナメるな。お前が思つてるほど、暗部は浅い場所じゃなかつた」

「…………」

対照的に真柴は、冷静に、それでいてどこか杉下の考えを戒めるよう、に、無表情の中でもそれは伝わってくる。

その言葉を聞いて、押し黙る杉下。真柴はその様子を見て言葉を続ける。

「もつと頼れよ。それとも、信用しないのか？」

しおげかえつてしまつた杉下は、「……悪かった、ホント、いっぱいだつたんだよ」と俯きながら小さく呟いた。

そんな赤兎の髪を真柴はワシワシと撫で回す。

「い、今ものす」へ子供扱いされてる気がする

「実際子供っぽい性格してるだろ、お前

「くつ、自覚はしてるがそこまで言われる筋合いはないね」

黒川には、その意味事態理解できなかつたが、彼らの間には自分には想像もつかないような、何かクラスメイト以外の特別な関係であることは分かつた。

「おーい、もういいだろ。昼食の時間がなくなりますよー」

杉下のその言葉にハツとなる黒川。彼らの会話を聞き入ってしまい、ずっと立ち尽くしていたが、よく考えれば自分の行動は、客観的に見るとかなり不審だ。ここが人通りの少ない場所だったので辺りに誰もいなのは、ある意味救いかもしれない。

一人がそのまま食堂の方に向かつたので一安心だが、自分も友達を待たせているのだ。

歩を進めながらも、黒川は考えた。それにしても、あの一人は何者なんだろうか。暗部という言葉も気になる。

（表に立てない集団？ まさか、ねえ。 実際じつやつて学校にいる訳だし）

考えても分からない。ならどうするすればいいか。

結局午後の授業もぼうつとして全く話を聞いていなかつた黒川はいつの間にかホームルームを終えていた。

「生きてるか瑞希ー」

「ええ？ ああ！ なんとか頑張れたわ！」

目の前で上下に手を振る不知火セツナに面食らつた黒川は思わずビクッとした後、反射的に返答した。

「全然大丈夫じゃないでしょ。 どうすんの？ 真央は今日バイトなんだけど」

「ええ、うん。 帰るけどー」

まだ完全に覚醒していない黒川の脳は不知火の言葉を処理しきれていないようで、ドアの方を呆然と眺めている。そしてあるものを捕捉した。

杉下だ。

「じめん！ 用事思い出した！」

しばらくフリーズしていた黒川はいきなり席を飛び出し、教室を出た杉下を追う。

「えーっと、まだ疲れてるのかあの子。いや、ていうか私は！？」

彼女のつっこみに耳を傾けた者はいない。

日常の狭間（後書き）

最後までありがとうございました！

今回登場した真柴君と深井さんのイラストを『みてみん』さんに投稿しています。

上手くはないですが、よかつたらぜひ見に来てください！

マイページです。

<http://4121.mitemin.net/>

また感想、指摘がありましたら宜しくお願いします。

機密の線引き、それと天川スパイラル（前書き）

遅くなりました、ユーシンです。

今回は一般にギャグと呼ばれるものを田舎しました。

ギャグって何だろう？勉強が足りないな……。

～とある狭間の観測黒猫～

七月十八日、放課後、杉下光輝が足を運ぶ先は部活動でもなければ、家でもない。

アルバイトの彼が向かうのは、上司に指定された不規則な仕事場になることが多い。何故不規則なのか、というのは、情報収集という変わった職に携わっているからである。

昨日、都市伝説の青い円盤を追いかけるという、ハードワークをこなす彼だが、今日の仕事は、たまつた書類の廃棄という事務的なものだ。

一見共通性がないように思えるが、学園都市では、ハッキングなどによる情報流出を防ぐために、書類をあえてアナログな紙にしておくというのも少なずは無い。

世間を騒がせる円盤の目的や、簡単に捨てるのできない機密情報を探し、かき集め、要点をまとめて、報告する。必然的に、いらなくなつた紙の山を片付けるのも、もちろん自分の仕事のうちだ。

（まあ、ホントは円盤を壊すつもりはなかつたんだが……それにまさか『観測黒猫ブラックボックス』が発動するとは……）

追っていた円盤が、自分のクラスメイトの黒川瑞希に襲い掛かったので、おもわず感情的になり、後先考えず破壊してしまつたが、普

段はそんなことをするようなタイプではない。

銃だつて、機密にかかる人間なら、誰もが持ち歩くであろう護身用のつもりだ。

（瑞希に見られてたけど、後半は気絶してたし大丈夫だよなー）

ちなみに彼女を家に帰したのは女性の同僚であり、やましこコトは決してない。

途中までお姫様だっこをしていたが、もちろんそれも仕事のうちである。

よつて、少々ドキドキしたとしてもしかたがないはず。

少々不安げに道を歩いていると、「杉下！」と背後から呼びかけられた瞬間、まさかの本人登場にドキッとしてしまう杉下。

「な、何でしょ、」

「何でしょ、じゃないわ。 昨日の説明、してもらひわよ

杉下が振り返ったにもかかわらず、同じクラスの黒川瑞希は行く手を阻むように、彼の前に回りこんだ。

ちつ、憶えてたのか、と内心で愚痴る杉下だが問題ない。肝心の証拠が無いのだから。今朝自分の日で確認したが昨日の痕跡はしつかりと片付けられていた。

もしかすると、夢落ちでなんとか押し切れるかもしれない。

「悪いんだけどさ、これからバイトなんだよ。 残念だけどまた次回、つてゆーのは……」

「やうやう訳にもいかないわ。 昨日の事が気になり過ぎて、」

ちはまともに授業が受けれてないの」

その文句に、恨めしい表情を追加し、脇を通ろつとする杉下に圧力をかける黒川。

阻まれた杉下だが正直対処に困るのだ。昨日の事といつても、そのすべてをなぞるよう順序良く説明するにしても時間が掛かるし、彼女を納得させるためにはそれをもつと噛み砕く必要があるだろう。ましてや、一般人の彼女には話せないような部分を伏せながらとなると、真剣に明日まで話の構成を練る必要がある。

とりあえず最短で終わらせよう。

「具体的にどこが気になるんですか」

「うーん……、あの青い円盤はどうなった、とか？ 昨日言つてたバイトつてどんな仕事なの、つていつ」

「回答一、塵になりました。回答二、運送業です、はい以上

「短い！？ あまりにも極端過ぎて説明しよう、つていう誠意がまったくもつて感じないわ！」

「簡略さで誠意を表したつもりなんだが

「そこよりも、もう少し内容を重視して欲しいんだけど」

「わがままだなー」

そんな流れでいつも通りの有耶無耶スキルを発動した杉下だが、突然「ああ！？」と何かを思い出したように叫ぶ黒川。

正直面倒になつてきたので最後だけは真面目に答えるか、と思い始

めた杉下だが、その考えはすぐに取り消された。

「杉下はさ……、どんなに怪我しても死はないの……？」

さつきの質問が捨石だつたかのように、無自覚ながらも彼女は最大の疑問をこの瞬間に杉下へ投げかけた。

おもわぬ質問に息を呑んでしまつ。思考が再開して初めて浮かび上がってきたのは後悔。

動かなくなつっていた彼女を見て、氣を失つていると思いこんでいたが、それが軽率な判断だった。

だが、今はそれよりも、質問に答えるべきかどうか。彼女も同じよう

うに固まつたまま杉下の答えを待つている。

「……普通じゃ死なない。心臓に穴が空いても、脳を撃たれても再生する、そーゆー能力なんだ。まあ『無能力者レベル〇』なんだけど」

「『無能力者』？ そんなにスゴイ能力なのに？」

「少なくとも、『身体検査システムスキャン』にはそう出でるな

『身体検査』とは、この学園都市で行われている超能力開発の六段階の結果を計測する検査のことである。

『無能力者』とはその中でもっとも低い値であり、実質的に力が無いに等しい。

ときおり杉下のよくな例外も現れるが、所詮は機械が計測するのだから、計測不能が出てしまえば結果は無能力者になるというわけだ。

「……そつか。だから腕が治つてたんだ」

そう呟きながら黒川が何か考え込んでいる。

「それでもまだ色々と座じいわー ていつかますます眠れない！」

「いやいやいや、ここまで事情聴取に応じたんだ。 そろそろ釈放してくれてもいいー」

「そうね……じゃあ、私が杉下のバイトに付いていくことにする。 そっちの方が手間が省けるし」

肝心の、何で家にいたの、といつ部分に触れられなかつたのは幸運かもしだれないが、これはこれで面倒かもしだれない。

まさか本当に来るなんて、と思いつつ追い払おうとしない杉下。 最初は渋つていたものの、黒川が頑固なことを知つてゐるため、結局こちらが折れるしかない。

先ほどから、無理やり背後を取られたまま、質問は続いている。

「で、具体的に向するの？」

「うーん、別に、わざわざも言つたとおり、荷物を運ぶだけだな」

あえて廃棄の話をしないのは、情報の件に首を突つ込まれるとしてもかいなので、あえて運送と表現しているのだが、嘘ではない。苦しいが、情報を運ぶのが彼の仕事だ。

「（銃が必要な運送業……）……ま、まさか大量の白い粉を！？
昨日のアタッショケースはそういうことだったのね……」

「いやいやいや、たしかに疑われる要素は満載なんだけど、実際ただの運送業なんだよ。だからそんなに距離を取らないで欲しいな」

立ち止まってから、少し後方に下がりながら疑惑の視線を送る黒川。杉下が近づく分、あとずか後退る光景は周囲の通行人が何か勘違いをしてしまいそうだが、本人達は気づいていない。

もう疲れてきたのでとぼとぼ歩き出す杉下。さらにその背中を疑惑の目を向けたまま追う黒川。

「駐車場？」

杉下が突然方角を変え屋外駐車場に入していく。

「いいで車に乗つて、地下街まで荷物運びの予定なんだけど、」

杉下が真っ白なワゴン車の中を覗くが誰もいないが、後ろの荷物室には大量のダンボールがすでに積み込まれていた。
ちなみに、助手席には昨日の真っ赤なアタッショケースが置いてある。

「運転手がいないの？」

「いやー、そうじやないんだが……」

うーん、と唸りながら顎に手を当てている。

「おーそいわあ——！」「右に同じい——！」

「ぐふああー？」

背後からのとび蹴り（ダブル）奇襲により顔面を車のガラスに叩きつけられた杉下。ガツンッ！…という鈍い音が痛々しさを物語っている。

ガラスは防弾なので問題ないが、杉下の顔は車体を摩擦しながらずれ落ち、そのまま地面に倒れ伏せた。

唖然とする黒川も気にせず、襲撃者である肩までツインテールの少女達は、まだ不服そうな表情でその場に佇んでいる。クリッとした大きい目が特徴的な、小学生ぐらい可愛らしい彼女達は近づいて見ても分からぬほどに良く似ており、見分けるのは至難の技だ。

「そつ、んなに待たした憶えはないんだが、そんなに激昂してるのはどうしてでしょ？」「

足をガクガクさせながら立ち上がった杉下は、眉間にしわを寄せながら静かに訴えかける。

「何でかつて？ 待つてたからだよ。 私たちはこの日を待ち続けた！」「だが、もう我慢の限界だあ！」

「……？ 今日は廃棄だけで、特に素敵なイベントは起らぬ予定なんだが」

「イベントだよー。復活祭という素敵なイベントだよー」「今の私

たちは、冒険の書が消えてからやつと天空の花嫁選びにたどり着いた、そんな気持ちでいっぱいなの。 分かるか少年ッ！」

「セーブデータが消えたことによりオレが殴られたと、……なんて理不尽な」

「元は光輝がはつきりしないからだよ！」「勧誘というルートをなんか選ぶから、グダグダな展開を繰り広げることになつたんだ！」

「はつきりしないだと？ オレは今までファイブでは金髪の花嫁しか選んだことがないはずなんだ。 それにお前達の部屋のファミコンに触れた憶えは皆無だ！」

「ファミコンじゃない。 それは、もつと大きなものよ……」「ちなみにこれ以上はさすがにメタ発言だぜ！」

（結局何が言いたいんだよ、この双子……）

とにかく一方的に杉下（高校生）が双子（小学生）に罵倒されてい る。

成り立つていてる気がしない会話で、置き去りにされてる黒川は、 とりあえず杉下に小声で話しかける。

「ねえ、この二人は？」

「仕事の同僚、になるな」

「ええ！？ だって小学生よ！？ ちよつと反抗期な双子の小学生 よ！？」

「バイオレンスな小学生でーす」「じんじまー」

「い、じんじまは、」

黒川が混乱しているにもかかわらず、当の本人達は明るい笑顔で彼女の前に近づいてきていた。

「私が姉の天川明でー」「私が妹の照アマノガタでーす」

「私は、杉下と同じクラスの黒川瑞希。タルよろしくね」

杉下との態度の変容ぶりに驚く黒川だが、おそれくアレは彼にだけなのだろうと無理やり納得しておく。

簡単な自己紹介が終わると、妹の照がポケットから鍵を出し、はいと杉下に手渡す。

「じゃあ、いくか」

とはいっても、さきほどから見渡したところで、ここには杉下と黒川、そしてこの自由姉妹しかいない。

そんなことも気にせず、杉下達は車に乗り込み始めている。

「ねえ、運転手はどこにいるの？ 周り誰もいないけど、」

「ああ。 オレだよ」

しつとじている杉下からは悪意を感じない。

「ホントに運転するなんて……」

地下街付近にある駐車場で、車から降りた黒川は眉をしかめていた。

「これでも結構慣れてるんだけど、下手だつた?」

「やうじやないけど……、銃刀法に免許偽造つてどうなの?..」

「必要ない、ルールも破らないと、やってけないのさ」

「どうかの役所のお偉いさんみたいねえ」

杉下が後ろのトランクを開けると、双子がそちらひとつひとつ歩いていく。

「じゃあ、始めますか」

「ガッテンです兄さん!」「やつちやえマイシスター!」

杉下が一つのダンボールを持ち上げると、双子の姉の明が虚空を掴むように手を伸ばした。

すると、杉下と姉のゆうひに真つ黒な円が、元の空間を押し広げるみたいに出現する。

大きさはダンボール箱より少し大きめ、横から見ると「ペーパー用紙と同じほどの厚さだろうか。

「な、何なの、これ?」

「ふつふつふ、これこそが私の能力、『亜空転送ブラックホール』ツ！」

いきなりな出来事に驚きながらも、奥行きのない穴を覗くように見入る黒川に対し、待つてましたと言わんばかりに双子が説明を始める。

「例えば、このダンボールを、この中に、放り込んでー、」「すれ

た座標に一時的に送り込む」

明が「お、おもい、」と言いながら運んできたダンボールを円に当てるど、沼にゅっくり沈んでいくように、箱がその場から消失する。続いて杉下が、平然とした様子でダンボールを黒い穴の中に放り込み始めた。

「それって『瞬間移動テレポート』じゃないの？」

「それが違うんだよねー。もし、普通のテレポーターなら、転移距離、時間、重量の設定が必要になる訳だ」

だが、と照は眩いで、

「私たちの『亜空転送ワームホール』に、その常識は通用しねえ」

まるでヤクザ予備校生+新人ホストのような口調で強く言つて切る一人。

「『亜空転送ワームホール』？」

「そう、私たちは一人でこそ真価を發揮するのを」、「明が送った物は、いつでも私の『亜空輸送ホワイトホール』で、好きな量を、時間、場所とわず取り出せるの」

「へえ、セットの能力なんて、そんなのもあるんだ……」

関心する黒川に満足したのか、双子は「よっしゃー」と勢いづけて荷物を運び出す。

それを見て、小学生に運ばせるのが忍びなくなつた黒川も「私も手伝うわ」と三人に加わっていく。

トランクの中身が半分以下まで減少したのを見て、姉の明は空いた場所に腰掛けた。

そんな彼女の目線は、黒川の方に向いている。

（やつぱり、知らない人とは気まずいのかしら？ 人当たりは良さそうな感じだけど……）

それに気づいた黒川は「どうかした？」、と尋ねてみると、

「やはり、ずつきーは我々の仲間のようだ」「たしかに、彼女からはもはやそういう才覚を感じるよ」

ふつふつふ、と笑う明に乘じ、妹も手を止め、ひょこっと顔だす。なんだかよく分からぬが、『ずつきー』というあだ名を付けられているようなので、わたくしの心配は取り越し苦労らしい。

「自分で言つのもなんだけど、才覚なんて言葉、今まで聞いたことないわ」

ふふっと笑いながら、黒川はよく分からぬまま謙遜するが、姉妹達の目線は黒川の顔よりも少し下あたりを見つめていることは気づいていない。

「いやいや、さすがですよ」「間違いなく、ずつきーは、私たち『まな板連盟』の仲間だね！」

グッと親指を立てる二人。「へつ？」と口から漏れる黒川は彼女達の言動を理解できていない。

「高校生でその値は見事だね」「なかなか、そんな胸囲はお目にかかるないよー」

「な、な、なな、なああああ！？」

胸囲、で双子の意図を理解した黒川は顔を赤くして口をぱくぱくとしたまま固まってしまう。

まさか今日初めて会った人物にこんなコトを言われる日が来るなんて、誰が想像できただろうか。

「どうやら双子は胸が成長しないなんて噂があるらしい……」「でも大丈夫！ ヒンヌーはステータスだ！ って偉い人が言つてるんだよ！」

怪しい宗教のようなキャッチフレーズを、こうこう表情を変えながら熱弁する双子。

たいして黒川は、うつむきながら、わなわな全身を震わせていた。

「そんなことないわ！！ 私は毎日牛乳も飲んでるし、ちゃんと体

操もしてるものー。だから、きっとこれからだもんー。」

バツと顔を上げると、開口一番に自身の全力を持って完全否定する黒川。

おもわず双子も「おおおー?」としり込みする。

激しく呼吸する黒川はあることに気づいた。一つは自分が今まで誰にも言つた事の無い秘密を大声で暴露したしまつたこと。もう一つは、今、クラスメイトの一人、黙々と仕事をしていたはずの杉下が驚きのあまり目を大きく見開いたまま、固まつていることだ。

二人の目が合つた瞬間、両方の顔がリングゴのように真っ赤に染まる。

「ああ、違うの、違うのよ……。い、今、聞かなかつたこと」と

「…」

油の切れた工作機械のように、がたがた震える黒川。

「ホント、すいません……」と手を泳がせながら謝る杉下。頭に?を浮かべる双子は、杉下が代わりに頭を下げて「い」とは認識していなかつた。

地下街までの道のり、二人が氣まずい空氣をさうもない会話で過ごしたのは、この後の話。

機密の線引き、それと天川スパイラル（後書き）

最後までありがとうございます！

どうでしよう？最初に質問つて……すいません。

初めてこんな暴走してみたんですが、アウトかセーフ、悪ふざけじやないか自分で判定できないのが難儀です。

感想、アドバイス、天川自重しろ、ハレンチ千万！またはその逆の方、感想板にて宜しくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1783y/>

とある狭間の観測黒猫

2011年11月17日18時54分発行